

子供の確かな学びを育む授業づくり（最終第4年次）

4年次研究のまとめ

本研究では、各部の実践を通して、次のような子供の姿を確認することができた。

小学部 「生活科」	○風の感覚を楽しんだり、風の力を利用して素材や玩具を動かしたりする活動に取り組む中で、風が出てくる送風機に顔を近付けたり、送風機に帽子を当てて繰り返し飛ばして遊んだりする姿
	○校内の模擬店や校外の店での買い物活動に取り組む中で、手順に沿って買い物をしたり、財布にお金が入っていることを確認し、チャックを閉めるなど金銭を大切に扱おうとしたりする姿
中学部 「国語科」	○話を聞き取り、聞いた内容の真偽を確かめる活動に取り組む中で、相手をよく見ながら話を聞いたり、確かめたことを自分から友達に伝えようとしたりする姿
	○新入生に学部の魅力を伝える活動を通して、教師からの依頼を正しく聞き取ったり、伝えたい内容を時系列や伝えたい思いなどの順序に沿って整理したりする姿
高等部 「数学科」	○客層ごとのニーズを把握し、在庫の調整に生かすために、校内カフェの注文数のデータを分析し、様々な観点からデータを円グラフや棒グラフに表したり、グラフを比較したりする姿
	○部屋の中の様々な長さを測定する活動を通して、長さを普遍単位（m, cm）で表したり、部屋に家具を置くために、測定した長さとカタログに記載された長さを比べたりする姿
通級指導部 「自立活動」	○分数の計算問題に取り組む中で、「自分の気持ちに向き合う」「計算の手続きを言葉で整理する」など自分に合った取組方やその良さを言語化しながら前向きに問題を解こうとする姿

このような主体的に学ぶ子供の姿を引き出すことができた要因として、各部で各教科等の内容に関する問い合わせや学ぶ目的を明確にし、子供が関心を持って学び続けられるように支援を講じてきたことが挙げられる。各部が育成を目指す資質・能力を踏まえ、子供の実態に応じた支援を重ねながら、授業づくりを進めてきた成果である。そこで、4年次研究のまとめとして、各部の実践を基に、「関心を持って学び続けるための支援」について整理する。以下では、まず「好奇心」や「目的意識」を喚起する支援、次に学習を継続する上で重要な「見通し」や「学ぶ喜び」に関する支援について述べる。

1 関心を持って学び続けるための支援について

資質・能力を確かに育むためには、教科等に関わる見方・考え方を子供がどのように働かせるかを考えながら授業を構想する必要がある。その際に重要となるのが、教科等の内容に対して問い合わせ、その問い合わせに対する答えに迫ろうと主体的に学習に取り組むことである。特に4年次研究では、3年次研究までの成果を踏まえ、「体験的、実際的な活動」の設定を支援の前提とし、「具体的なヒト、コト、モノ」との

関わりを通して、子供が関心を持って学び続けるための各手立てが直接働くよう整理した。以下では、各部の実践から有効であった手立てや明らかになった点について述べる。

(1) 「好奇心」や「目的意識」を持つようにするための手立て

- 教科等の内容に関する対象（ヒト、コト、モノ）に意識を向け、問い合わせを生むことができるよう、新奇な教材や既習事項にそれを生む教材を提示し、子供が教材に存分に触れたり、比較したりする場を設けるとともに、教師がその反応を拾い、言語化しながら、問い合わせを生む発問を行ったこと。（好奇心）
- 自身の取組方に意識を向けられるよう、自信を持って解ける既習課題を扱った後、類似の初見課題を提示し、どのように取り組むと良いかを問い合わせたこと（好奇心・通級）

小学部生活科「風の力の働き」の実践では、まず風を体で受ける心地よさを味わう「活動自体を楽しむ目的意識」を基盤とした。その上で送風機に帽子を当てて飛ばすなどの「新奇な教材」を提示し、オノマトペを用いて視覚化・言語化することで、「風が物を動かす」という教科等の内容に対する好奇心を喚起した。その結果、風の有無による物の動きの変化に注目する姿が見られた。

中学部国語科の「A 聞くこと・話すこと」の実践では、話す内容が書かれたカードを無作為に並べて提示し、どんな順序で話すと伝わりやすいかを問い合わせた。これにより話す順序に意識を向ける姿が引き出された。

高等部数学科の「C 測定」（長さ）の実践では、既習事項とのずれに気付けるよう、前時までに普遍単位「m」を用いた測定を行なった上で、本時では1m以上2m未満の長さを提示した。その結果、繰り返し測定したり、「『m』だけではぴったり測れない。」と発言したりする姿が見られた。

これらの実践から、特に小学部では、活動自体を楽しむ「目的意識」を基盤としながら、徐々に教科等の内容へ意識を向けていく支援をが有効であることが分かった。また、「好奇心」や教科等の内容に関わる「問い合わせ」を生むためには、教科等ごとの基本的な思考の流れや教科等の特徴を踏まえ、実態に応じた教材や提示方法を工夫することが重要である。

通級指導部の実践では、学習に対する苦手意識の強い子供に対して自信を持って取り組める課題から始め、前向きな思いを高めた上で、徐々に自身の取組方へ意識を向けられるようにする支援が重要であることが明らかになった。

- 学習に関連した自身の目的を持って学ぶことができるよう、認知面の発達や学習における成功体験の蓄積を踏まえ学習活動に興味を引く要素を取り入れたり、達成のイメージを持ちやすい具体的な活動のゴールを示したりするとともに、それらを通して学習内容と自身の生活や自己実現とのつながりを確認したこと。（目的意識）
- 学習を通して成功体験を重ね、学習に対する前向きな思いを持ち始めた段階で困難の改善・克服に向けた通級指導での目標を設定・共有したこと。（目的意識）

小学部生活科の「シ ものの仕組みと働き」（風の力の働き）の実践では、子供の実態に応じた興味を引く様々な風と関わる教材を工夫した。その結果、時間いっぱい活動に取り組み続けたり、風で帽子を繰り返し飛ばしたりする姿が見られた。また、小学部生活科「ク 金銭の扱い」（買い物）の実践では、模擬店を設定し、子供が欲しい商品を並べて提示したことで、欲しい商品を指差したり、

自分から模擬店に向かおうとしたりする姿を引き出された。

中学部国語科「A 聞くこと・話すこと」の実践では、活動のゴールを具体的にイメージすることができます。新入生に学校生活の楽しさを伝える動画を撮影する活動を単元の最後に設定した。これにより、「〇〇を伝えると楽しいと思ってもらえそう」と発言したり、提示された選択肢の中から伝えたい内容を選んだりする姿が見られた。

高等部数学科「D データの活用 データの収集とその分析」の実践では、作業学習と関連付け、学んだことが作業学習にどのように活かせるかを確認しながら授業を進めた。その結果、データをグラフに表し、読み取ったことを教師に伝えたり、友達と話し合ったりする姿が引き出された。

通級指導部の実践では、「好奇心」に関わる支援と同様に、学習に対する前向きな思いを高めた上で目標を設定・共有することで、困難の改善・克服に向けて前向きに課題に取り組もうとする姿が見られた。

「目的意識」を喚起する際には、子供の実態に応じて以下の3段階を検討する必要がある。「①活動に取り組むこと自体に対する目的意識」：主に小学部において具体物との関わりそのものを楽しむ段階、「②学んだことを生かして取り組む課題の達成に対する目的意識」：主に中学部の紹介動画制作や高等部のカフェ運営など、他者や成果を意識する段階、「③自己実現に向けた目的意識」：主に高等部の将来の生活や通級指導部における困難の改善・克服（算数への不安解消など）といった、自己の成長を目指す段階。特に、②に関しては、子供が「他者意識」を持てているかどうかを考慮することも必要である。高等部数学科「C 測定」の高等部の休憩室をレイアウトする実践では、まず、子供自身がその部屋の良さや、そこで過ごす楽しさを充分に味わう機会を設けた上で「みんなのために」という思いを持てるよう働き掛けを行うことで「高等部みんなに使ってもらえる部屋をレイアウトしたい」という「目的意識」を持てるようにした。中学部国語科「A 聞くこと・話すこと」の実践においても、学校生活を心から楽しんでいる生徒の実態があるからこそ、他者に「伝えたい」という思いを持つことができたと考える。また、「学んだことを生かして取り組む課題」は「授業で取り扱う目の前の課題」、「他の指導の形態と関連させた課題」、「将来の生活に関連した課題」など、「課題の身近さ」を考慮し、学びの活用場面を子供自身が想起できることを大切にしながら、「生活年齢」や「認知面の発達や成功体験の蓄積」も加味した上で課題を設定することで、より適切に「目的意識」を喚起することができ、主体的に活動に取り組むことにつながることが分かった。

(2) 「見通し」持てるようにするための手立て

- 学習のねらいに迫るために、どのように取り組むかを理解したり考えたりできるよう、取組方のモデルを示したり、一緒に試したりしたこと。また、子供の実態に応じて取組方を選択、調整したりすることができるよう、取組方を選べる時間の設定や選択肢の提示を行ったこと。
- 「こうするとうまくいくかもしれない」と自身の学び方に見通し持てるよう、提示した課題に対して、どのように取り組むと良いかを聞き取り、取組方の言語化や動作化を促したり、前時での取組方を振り返ったりした上で、課題に取り組む様子を見守ったこと。

取組方のモデルや手順を示す際には「目的意識」と関連付けながら手順一つ一つの意味や機能を

子供が理解できるようにすることが重要である。小学部生活科の「ク 金銭の扱い」(買い物)の実践では、個別の確認カードを用いて買い物の手順を確認した。「かごに商品を入れる」という手順では、「買いたいものを買う」という「目的意識」を喚起した上で、購入前の商品を入れることや複数の商品を持てるうことなど「かご」の機能に着目できるようにすること、手順通りに行おうとする意識を持つ姿が見られた。

また、子供の実態に応じて取組方を選択、調整できるようにするためには、複数の取組方を提示するだけでなく、それぞれの良さを確認したり、実際体験したりする機会を設けることが大切である。ただし、授業によっては単元内で十分に体験の機会を確保することが難しい場合もある。そのため、取組方の選択や調整は、一つの単元や教科に限らず、教育活動全体を通して意識的に支援していく必要がある。例えば「ペアワーク」を日常的に取り入れ、友達と相談したり、見比べたりする良さを子供が感じられるようにすることで、授業内でも自然に取組方の選択肢として扱うことができる。

通級指導部の実践では、課題に取り組む中で子供がつまずいた場合に、やり取りを通して具体的なつまずきの箇所を捉え、アセスメントや行動観察に基づいて、子供の実態に応じた取組方を提案した。計算の手続きと一緒に確認しながら進めることで、子供に合った取組方を子供と共に作り上げることができた。

(3) 「学ぶ喜び」に気付けるようにするための手立て

- 学習を通して学んだことに気付くことができるよう、取組の最中や振り返りの場面で、できしたことや分かったことを確認し称賛したこと。また、分かったことを生かして取り組むことができる活動を設定したこと。(教科等の内容の価値)
- できしたことや自分の成長に気付くことができるよう、活動中の即時的な承認・称賛を行ったり、振り返りの場面でできるようになったことを称賛したりするとともに、生活の中でどのように応用できるかを確認すること。また、自分の取組方に着目することができるよう、取組の成果と過程を結び付けて称賛したり、実態に応じて取組方について自己評価の場面を設けたりしたこと。(自分自身の価値)
- 提案された取組方について納得し、活用することにつながるよう、「なぜできたのか」を問い合わせ、学び方の言語化や動作化を促した上で、取組の様子を再現しながら試した学び方の有効だった点(強み)や、これまでうまくいかなかった理由(苦手さ)を伝えたこと。(自身の強みや苦手さへの気付き・自分に合った学び方への気付き)

「教科等の内容の価値」に気付くことに関して、小学部では、活動中の即時的な称賛に重点を置き、オノマトペ、動作化や視覚化などの支援を講じることで、「教科等の内容の価値」に気付く姿を引き出すことができた。小学部生活科の「シ ものの仕組みと働き」(風の力の働き)の実践では、「ビューンで動いたね」などと教師が子供の気付きを代弁したり、風の動きが視覚的に分かりやすい教材を工夫したりすることで、風で飛んだ物を指差したり、掛け声に合わせて物を飛ばそうとしたりする姿が見られた。

中学部、高等部では、活動中の即時的な称賛に加え、振り返りの場面で分かったことを確認したり、学んだことを活かして取り組む活動を設定したりした。その結果、学習した教科等の内容がどの

ように活かせるかを理解し、実際に活かして自身の目的を達成することで価値を感じたりする姿を引き出された。

「自分自身の価値」に気付くことに関しては、どの学部においても「目的を達成できた」という思いを持てるようになることが重要であった。小学部生活科の「ク 金銭の扱い」(買い物)や中学部の実践にでは、単元の中で学んだことを活かす課題を継続的、段階的に設定することで、繰り返し「できた」という思いを持つことができ、主体性の持続につながった。また、中学部や高等部の実践では、「見通しを持てるようにするための手立て」と関連付けながら、ワークシートや写真を用いて取組の過程やその良さを振り返ることで、自分に合った取組方を選んだり、考えたりする姿が見られた。

通級指導部の実践では、なぜできたかを言語化し、自身の強み(言語化力)と結び付けたことで、学び方の有効性を納得し、自身の価値への気付きにつながった。こうした取組により、試した学び方が自分に合っているという確信が徐々に高まり、自分に合った学び方を習得し、在籍校の学習や生活に生かそうとする意欲につながった。

2 まとめ

4年次研究を通して「関心を持って学び続けるための支援」を講じることが、各学部の実践において主体的に学ぶ姿を引き出す上で有効であることを確認することができた。「関心」や「問い合わせ」を出発点として主体性を喚起し、「見通し」を持ち、「学ぶ喜び」に気付くことで、主体性の持続や学びの好循環が生まれることが明らかになった。また、教科等の基本的な思考の流れや教科等ごとの特徴を踏まえ、子供の実態に応じた支援を講じることで、生活に結び付いた「生きて働く知識及び技能」を身に付け、それらを活用しながら「思考、判断、表現」し、自身の目的に向かって取り組む姿を引き出すことができた。さらに、各手立ては相互に関連しており、単元を通して学びの好循環をどのように生み出すのかを、見通しながら、単元構成や支援を検討することの重要性が示唆された。

次年度の研究では、これまでの成果や明らかになったことを踏まえ、子供自身が自ら思考し、学び続けることができる授業づくりの在り方を追求していく。そして、学校生活全体を通して、自立と社会参加につながる教育活動の実現を目指していく。

(文責：斎藤 瞽汰)